



で質問したのだから、過去(否定)の「ませんでした」で答えると誤りで、「まだ」の場合は、「読んでいません」と未完了で答えなければならないと説明するだけでは直された外国人のほうは釈然としないだろう<sup>1)</sup>。

「読みましたか」に形式的に対応しているのは明らかに「読みませんでした」であり、日本人はどうして答え方を質問の形式に合わせないのか、完了と言うなら、質問のほうで完了を明確に表し、「もう読んでいますか。」と言うべきではないかと考えるだろう。

初級の日本語ではこのように規則的な対応が崩れてしまうような場合、答え方に不調和が現れないように「はい」という短い答え方だけにし、この問題を先送りにするか、定型と扱い、繰り返し練習させることで覚えさせれば解決と見なすのがふつうである。

しかし、この状況で使えるもう一つの質問文と二つの肯定の答え方も見てみると、答え方を質問に合わせなければならないと言うだけではすまないことが分かる。

Q「この本はもう読んでいますか。」    A「はい、もう読んでいます。」【○】  
A'「はい、もう読みました。」    【○】

こちらの例で考えれば、完了の質問に対して完了で答えることよりも、これとは形式の異なる「読みました」が完了表現として「読んでいます」と等価になること、これが問題の根底にあると分かる。

初級日本語で「読んでいます」はもっぱら英語の現在進行形に対応させ、完了の使い方に触れまいとする傾向が強い。おそらくそのためだろう、中級者、上級者の日本語作文を讀んでいて、ここではどちらも正しいため問題としなかった肯定の「もう～しています」と「もう～しました」の選択に違和感を覚えることが多い。

文法的一致はまず形式において捉えられる。日本語の文法を記述するにはこのようにほぼ同じ内容を複数の形式が共有する現象も考慮に入れねばならないだろう。

## 1-2 違和感を生む一致

1-1 は明らかに間違いと判断でき、誤用例としてよく取り上げられる型だが、次の例は微妙だ。

Q「あのコンピュータを買うつもりですか。」  
A「いいえ、買うつもりではありません。」  
A'「いいえ、買うつもりはありません。」

質問に形式的に対応する A の答え方は間違っていない。従って、誤用と見なされることはないだろう。しかし、多くの日本人はこのような場合、「ではありません」ではなく、

A'のように「はありません」を使う。

つまり、質問の形式に答えの形式を一致させようとはしない。だから、外国人が答えAのように形式を一致させているのを聞くと、間違いではないと思いつつも、違和感を覚える。

Aの答え方をする外国人に「つもりがありますか」で質問すれば、「つもりはありません」と、たぶん日本人と同じように答えてくれるだろう。しかし、それは日本人と同じ感覚を背景にしてではない。質問の形式に答え方を一致させるからだろう。表面的に抵抗は感じられなくなるが、背後に言葉選びの質の違いが厳然とある。

さて、「ですーではありません」型と「がありますーはありません」型の二つから日本人に選ばせるものは何だろうか。日本人に質問すれば、二つはやはり少し違うと答えるだろう。しかし、二つの型のどちらで質問されようと、答え方が違うとも思えない<sup>2)</sup>。

この二種の形式で作られる質問とそれに対する否定の答え方で普通と感じられるのはそれぞれたとえ一文字であっても短いほうだが、決定要因はそれだけなのかもしれない。選択というものはどんな基準によっても行える。

## 2 誤形成と文法における不調和

次に、日本語文法の調和の欠け目が間違いを呼ぶ例を見てみよう。

### 2-1 形容詞の変化と接続形

イ形容詞／ナ形容詞の変化、接続形の混乱は日本語を勉強した外国人が必ず陥ると言えるほど一般的な現象だ。イ形容詞だけであれば簡単な変形規則としてすぐ習得される変化がナ形容詞の形式に引かれてしまう。

楽しい	－	楽しくない	－	楽しかった
にぎやか	－	にぎやかではない	－	にぎやかだった
		↓		↓
楽しい	－	楽しいではない*	－	楽しいだった*

【\*は間違い】

文法を教えるとなると、規則性、対応ができるだけ目立つようにする。変化規則は「作られ方」ではなく「作り方」とされるぐらいだから、整然と並べられた例を示された学習者は、その規則をまず覚え、後で新しく覚えた語彙を使うとき、覚えている規則通りに作ればよいと考える。

形成の規則性だけを見れば、それだけでも混同が起きやすいと思えるが、この混乱には強力な動因となる形容詞がある。ナ形容詞でありながらイ形容詞のように見える「きれい」である。

楽しい	— 楽しくない	— 楽しかった
きれい	— きれいではない	— きれいだった
	↓	↓
きれい	— きれくない*	— きれかった*

イ形容詞の音変化に引かれて外国人が間違っただけの変化をさせることは、日本人も標準とはならないが「きれかった」を方言的に使っていることを考えれば五十歩百歩かもしれない。

しかし、これは「きれい」が関わる誤用のまだ前半だ。「きれい」は漢語（綺麗）でありながら日本人に非常に好まれ、「美しい」という意味だけではなく「汚れがない」という意味、また「きれいに」と副詞化して「完全に」のような意味にまで広がっている。これは日本語で形容詞が「楽し」から「楽しい」となったことで語形の親和性ができたからかもしれないが、とにかく使用頻度の極めて高い形容詞となった。そのため、日本語の初級段階からチェックされ、矯正される機会がかなり多い。

すると、今度は「きれい」の正しい接続形式が既に習得されていたイ形容詞の変化に影響を与える。これが後半である<sup>3)</sup>。

楽しい	— 楽しくない	— 楽しかった
きれい	— きれいではない	— きれいだった
	↓	↓
楽しい	— 楽しいではない*	— 楽しいだった*

このような間違い方の変化は日本語の習得過程として避けられないものとも見えるが、大きな動因になるのが形容詞「きれい」ただ一つであるなら、間違いをいくらかでも抑止する策は考えられる。

「きれい」は初級日本語に限らず現代ではたいていひらがなで表記される。ひらがなで表記され、「いい／おいしい／やわらかい／あまい／きれい」と並べられるとイ形容詞としか見えず、例外的にナ形容詞の使い方をするのだろうかと思えてくる。

だからと言って、使う日本人がほとんどいなくなってきた「綺麗（な）」という漢字表記を使おうというのではない。一方、「キレイ」というカタカナ表記は日本人もある程度使っているようだ。「キレイです／キレイな」と使えば、「い」の音が漢字語彙の発音の一部であり、変化させてはいけないものであることを学習者の意識に残しやすい。

また、中級者、上級者の日本語作文には「くない／ではない」、「かった／だった」とは別に、文法項目として違っていると見えるが、同じ原因から生じるもう一つの誤用がある。

初級を終えるころ、あるいは後半ぐらいから「だ・する」の普通体が出てくる。そうになると、とたんに文末形の間違いが目につくようになる。

「楽しくない—楽しかった」と「きれいではない—きれいだった」を間違えなくなった

者でも、比較的書く機会の少ない普通体の日本語作文で「楽しいだ」の型の間違いを犯す<sup>4)</sup>。

規則性の提示とその習得のための反復練習というごく当たり前の教授法は、文法の中で一致せず、調和を壊している部分をどうしても隠すことになってしまう。

## 2-2 意味の対応、形式の不一致

日本語教育で形容詞として教えるのは当然イ形容詞とナ形容詞だけだ。ところが形容詞についてはこの二種の分類以外に考えなければならないことがある。語彙数がまだ多くない初級段階ではそれほどではないが、中級以上になるとナ形容詞絡みの間違いが目につく。以下にその例を挙げるが、これらの間違いは日本語のほうに責任があると言われそうだ。

- 日本の普通な家族を訪問しました。【普通の⇔特別な】
- 早く安定な生活ができるようになります。【安定した⇔不安定な】
- 安心な人は大勢いますが、みんなではありません。【安心している⇔不安な】
- 都会は人工なものばかりで好きではありません。【人工の⇔自然な】

形容詞の形態における規則性を強調していればこうなりやすい。形容詞ではなくとも形容詞的に使われる名詞句や動詞をもっと積極的に比較し、説明すべきだろう。

表したい内容が母語、あるいは媒介語となる英語で形容詞であるとき、外国人は日本語でも形容詞で表そうとする。そして、上記の例に見るようにナ形容詞の反意語を知っていれば、これらの語彙を当然ナ形容詞として使おうとする。

これらの反意語の対を見ても、形態的に形容詞でなければ形容詞として扱わなくていいと言い切れるだろうか。形容詞「特別な」の反意語である「普通の」は形容詞句と扱えるのでまだ抵抗は少ないだろうが、形容詞「不安定な」の反意語「安定した」はあくまで動詞だ。しかし、この反意関係があれば十分「準形容詞」と扱える。

形容詞	ない	同じ	可能な	必要な	変な	おいしい	滑らかな
同義的動詞			できる	要る	変わった	いける	すべすべしている
反意的動詞	ある	違う					ざらざらしている

反意表現、同義表現を整理してみると、英語などでは形容詞でしか表さない観念を日本語では「名詞+の」、動詞で表す例が実に多いことに驚く。

## 2-3 人称性と品詞

日本語の動詞には接統形の変化はあるが、西洋言語では極めて存在感のある人称変化がない。しかし、日本語教育では経験則から人称変化のように扱うものがある。

- ・私は旅行がしたい。 【○】
- ・あの人は旅行がしたい。 【△】
- ・私は旅行をしたがっている。 【×】
- ・あの人は旅行をしたがっている。 【○】

形容詞「たい」を三人称で使うことが規則として禁じられているわけではない。使えば三人称らしく突き放して客観的に見るのではなく、その人の気持ちを代弁するかのような表現となるようだ。一方、動詞「たがる／たがっている」は観察する「私」の目に映る人物の他者性がよく表され、これを一人称で使えば、まるで自己の中の他者を見つめるかのようで、やはり普通とは言えない表現性を持つ。

「たがる／たがっている」を使うことに何か抵抗を覚えるのだろうか、最近の日本語教科書では以下のような表現のほうが勧められるようだ。

- ・あの人は旅行がしたいそうだ。
- ・あの人は旅行をしたそうだ。
- ・あの人は旅行がしたいようだ。
- ・あの人は旅行がしたいと言っている。

三人称で使われるものがこのように変わったとしても、一人称と区別されていることに違いはない。

- ・私はあなたが好きだ。 【○】
- ・私はあなたを好いている。 【△】
- ・あの人はあなたが好きだ。 【○】
- ・あの人はあなたを好いている。 【○】

「好き」と「好いている」では人称性の線引きがはっきりしないが、それは「好く」から作られた「好き」がまだその意味に動詞性を残しているためか、形容詞性がこの言葉の場合特に好まれ、動詞性を浸食していつているためではないだろうか<sup>5)</sup>。

日本語では一般的に一人称が形容詞と、三人称が動詞と結びつきやすく、品詞の選び方自体が人称を代弁することは次のような例からもよく分かる。

- A「これ、持って帰って、みなさん（あなたと弟さんたち）で使ってください。」
- B「え、これを私たち（私と弟たち）にくださるんですか。ありがとうございます。
- （　　）は嬉しいです。（　　）はみんな喜びます。

このような問題を日本語の試験に出すと、正しく答えられる外国人はめったにいない。だが、日本人であれば迷うことなく「私は一弟たちは」と理解するだろう。

### 3 スタイルの選択

形式の不一致と内容の対応を考えるために日本語における表現の選び方を見てみよう。

#### 3-1 話題とスタイル

次の二つの質問文はどう違うのだろうか。

Q「これから何をしようか。」    Q'「これからどうしようか。」

「何を」と「どう」では名詞と副詞の違いがある。二つの質問文だけを比べると、その違いに意識が集中し、微妙な違いを考えてしまう。「何を」はこの後行う行為を名詞的にとらえているため、行為ごとに分ける感覚が出るためだろうか、強く問う感じがする。一方、「どう」は行為、時間を分断する感覚がないため、間接的で穏やかな問いになる。

しかし、これに共通の応答文を付けてみると、そのような違いは話者の個性の違いか、伝達の誤差のように感じられるだろう。

Q「これから何をしようか。」    A「サッカーの試合見ようよ。」  
Q'「これからどうしようか。」    A「サッカーの試合見ようよ。」

さらに、次の四つを比べると、意味の違いというより、表現の強度差のようなものが感じられる。

Q1「何があったんですか。」    Q2「何かあったんですか。」  
Q3「どうしたんですか。」    Q4「どうかしたんですか。」

例えば、様子のおかしい人を見かけ、そのままにはできないとき、このような質問をする。認知できる異常の程度、事態の緊急度によって選ばれそう。それも一つだけが選ばれ、使われるよりは、まず順位が下の穏やかなもので声を掛け、次に問いを明確化するため順位が上のものを使うのが普通だろう。

さて、このような問いに対する日本人の答え方を見てみよう。

A1「別に何もありません。」【×】    A2「別にどうもありません。」【△】

質問の形式に対応したこのような答え方は普通とは思えない。よく使われるのはA1と一字違いの次の答え方だろう。

A3「別に何でもありません。」【○】

これはA1と見間違えそうだが、文法としては対応していない。「何でもありません」は「あなたの目に何か異常と見たもの、それは何でもありません（問題ではありません）」と理解できる。すると、この答え方が対応する質問文は「何ですか」のはずだが、これがそのまま発話されることはあまりないようだ。しかし、このような場合、確かに日本人は例外なく「何だろうか」と自問する。そう考えれば、A3の答え方は発話前に心の中で湧き起こる問いに対応していることになる。これは直截的な表現を避けるための、レトリックに近いものだろう。

次に見る例も質問と答え方が対応しないものだが、これらは3-1で見たものとは違う。

Q「あなたはパソコンを持っていますか。」 A「はい、持っています。」

Q'「あなたはパソコンがありますか。」 A'「はい、あります。」

このような質問に対して、答え方を形式的に一致させなければならないと考える日本人はいない。「～を持っています」と「～があります」は文法的に違っていても、現実のコミュニケーションでは同義と見なされているのだろう。

Q1「論文のテーマが決まりましたか。」 A1「まだ決まっています。」

Q1'「論文のテーマを決めましたか。」 A1'「まだ決めていません。」

Q2「探している本が見つかりましたか。」 A2「まだ見つかりません。」

Q2'「探している本を見つけましたか。」 A2'「まだ見つけていません。」

この場合も同様に、「決める／見つける」、「決まる／見つかる」のどちらで質問されても、動詞を質問に合わせて答える必要はない。二つは半ば同義で、どちらを選ぶかは話者次第だ。「～を決める／～を見つめる」の方が意志を含み、「～が決まる／～が見つかる」の方は運任せで他力的とも考えられるが、そのような選び方が話者の考え、性格を本当に反映するかどうかは分からない。

### 3-2 スタイルの共存と表現

日本語教育で文法というと、現代日本語の共時的体系としての文法になるが、その記述を純化しようとして日本語の通時的側面を考慮しなくなり、返って文法規則に不調和を生み出してしまうこともある。

外国人に日本語を教える場合、積極的にではなくとも媒介言語に英語を用いることが多い。学習者が日本語に集中しにくくなる反面、説明が簡略化できるなど、それなりのメリットがあるからだ。ところが、大部分対応させられるのに一部一致しないと、所詮別の言語



だから仕方がないと即断しやすい。

そのいい例が英語の to と「に」、in と「で」の使用分布だ。英語を学んだ日本人は、to ～と見れば「に」、in ～と見れば「で」とまず翻訳しようとする。これらの前置詞と助詞にはそれほど強い対応を感じる。ところが、日本語で最も基本的な動詞の使い方での対応が乱れるため、日本語教育でこの対応関係を積極的に提示しにくくなる。

「に」の用法を列挙したとき、一番に来るのは初級日本語の項目配列と同じで、もっとも基本的な動詞「いる／ある」と使う「在り場所」の用法である。あとはたいてい「に－to」と対応させられるのに、これは例外のように in となる。上級レベルの日本語学習者の作文でも「に」と「で」の間違いは少なくない。

- ・ケイコは図書館に行きます。 Keiko goes to school. 【に－ to】
- ・ケイコは図書館で勉強します。 Keiko studies in the library. 【で－ in】
- ・ケイコは図書館にいます。 Keiko is in the library. 【に－ in】

もっとも基本的な動詞「いる／ある」と結ぶつく「に」が in であるため、「に－ in」は強く印象に残るのだろう、次のように「で」を使うべきところを「に」してしまう間違いが多くなる。

- ・わたしはこの大学に日本語を学びました。【×】
- ・わたしはこの大学で日本語を学びました。【○】

作文でこのような助詞の使い方を見れば必ず「で」に書き直す。しかし、この「に」は完全に間違いと言えるのだろうか。卒業式のスピーチなどで「この大学に学んだあなた方は・・・」、また文章語で「1946年広島に死す」と、動作の行われる場所に「に」が使われることがある。これは古い日本語のスタイルだ。しかし、古いと言っても使われなくなった用法ではない。現在でもこのスタイルを使う場面は少なくなく、現代日本人の日本語においてスタイルの選択肢となっている。つまり、「に」の使い方としては古い用法と新しい用法が現代日本語において共存しているのである。

古い用法		新しい用法
に (to / in)	→ に	→ に (to)
	→ にて／において	→ で (in)

「ある／いる」がとる「に」を in と to の用法を併せ持った古い用法と考えれば、「ある／いる」が to ではなく in をとることで生じる不調和は解消できる。「この大学で学んだ」が新しい用法で、「この大学に学んだ」が古い用法であることは日本人なら感

じ取れる。しかし、「ある／いる」がとる「に」が古い用法だと感じる者はいないだろう。もっとも基本的な動詞には変化がないのだから感じられなくて当然だ。

#### 4 文体における不一致と位相

たいていの文章は丁寧体と普通体（です・ます体とだ・する体）のどちらで書いてもさほど問題はなく、作文指導でも文章中で統一をとることだけを強く指導する。つまり、選択肢としては対等である。ところが、統一すると言っても、動詞形、文末形が隅から隅まで統一できるのは普通体だけで、丁寧体の場合には従属節などあちこちに普通体の語形が出てくる。

教える側の意図は文末形だけに向けられ、従属節など、文中までの統一は含んでいない。しかし、普通体のほうでは完全に統一できているという事実があり、丁寧体でも、文末の形を合わせ、統一するようにと指導していることで、日本人にとって普通とは感じられない文体傾向が出てくる。次の作文例で見てみよう。

A わたしは留学生として日本に来た。

●日本語が下手ですから、困ることがよくある。

○日本語が下手だから、困ることがよくある。

○日本語が下手なので、困ることがよくある。【●は誤りを含む／○は書き直し】

添削としては、「下手ですから」がこの普通体の文に合わないのので、「下手だから」か「下手なので」に書き換える。それで統一がとれる。しかし、その添削を見てこの作文を書いた外国人は、スタイルを合わせることが忘れていたと考えるだろうか。これを丁寧体に変えてみよう。

A' わたしは留学生として日本にきました。

○日本語が下手ですので、困ることがよくあります。【ひじょうに丁寧】

○日本語が下手ですから、困ることがよくあります。【ひじょうに丁寧】

○日本語が下手だから、困ることがよくあります。【丁寧】

○日本語が下手なので、困ることがよくあります。【丁寧】

この場合には理由節に「ですので／ですから」も「だから／なので」も使える。ただ「ですので／ですから」とすると、全文が丁寧であるからひじょうに丁寧と感ずる。「だから／なので」が標準的だ。

外国人学習者は文章を書くとき、文体を統一するよう教えられる一方、丁寧体で書かれた日本語の読み物、日本人の丁寧体での話し方に普通体の語形が混じっていることに気がつく。ただ、A'で分かるように、丁寧体の場合、理由節などではどちらのスタイルも使え

る。そのため、文体の統一は規則とされていても、それほど厳しいものではないのだろうと考えやすい。

これらのことを考えると、Aの作文を書いた外国人は、文体を統一しなければいけないことを知らないのではなく、主節と従属節ではスタイルを違えるのが普通だと知っている可能性が高い。統一については「日本に来た」と「よくある」で正しく合わされているからである。

このような日本語を使う外国人には丁寧体／普通体がただ日本語を書くとき、話すときにも選ばれるスタイルの選択肢というだけでなく、日本語の位相に基づくものであることを理解させねばならない。日本人が何か発言する前に思考段階で使う日本語は普通体とされているものとほとんど同じであること、外言に対する内言、ダイアログに対するモノローグのスタイルであるからこそ普通なのだということをである。

## 5 おわりに

文法が含む規則性の提示はその言語を理解させるためには不可欠である。一方、規則に合わないものは単に例外としてしまいやすく、それが規則性とどう関わるのかまではなかなか問われない。文法は、調和を乱すものをできるだけ排除し、純粹で単純なものとして示すことが望ましいと考えられるからだろう。

しかし、本論で見てきたように、一見規則に違反し、文法の調和を乱しているように見えるものも、突き詰めてみれば重層的な伝達に関係しており、その意味で極めて自然であると言える。非対応、不一致は一つ一つ見れば、文法の欠陥のように感じられるが、基礎文法、規範文法を越えて日本語の全体像を得るにはこのような不調和の中に埋もれている次元の異なる調和を検証していかなければならない。

1) 『日本語誤用分析』、明治書院、1997年、p.14

2) 「つもり」という語彙の使われ方にはこれら二種の形式以外にもう一種ある。これも本文中の二種の質問／答えのどちらとも組み合わせで使えるということは、同義と見なして差し支えないということだろう。

Q「あのコンピュータを買うつもりでいますか。」【○】

A「はい、買うつもりでいます。」【○】

N「いいえ、そんなつもりではありません。」【△】

3) この段階を経て、イ形容詞、ナ形容詞とも間違いなく使えるようになっているはずなのに、「きれくない」をまた使うようになる場合があるようだ。「きれくない」が使われている例には出会わなくても、「きれかった」が方言やくだけた会話で使われているのを知ると、それを真似て使い、さらにこのスタイルを日本人が使わないところまで拡大使用しているとも考えられる。また、日本人が外国人の誤用を真似て、新奇なスタイルとして「きれくない」と使っているのをさらに模倣しているとも考えられる。

4) 方言では使われているので、「楽しいだ」を間違いだと判定すると憤慨する日本人がいるだろう。小説やテレビドラマでも都会的で、きれいな言葉遣いができない者の「野卑な田舎者」のスタイルとして確立されている。だからといって、外国人の日本語学習者が「楽しいだ」と使うよう勧めることはできない。これは明らかに標準的な日本語のスタイルの選択肢には入らないものであり、だからこそ方言としての価値がある。

5) 「好き」は「～が好き」と使うのが普通だが、「あの人が私のことを好きだなんて知らなかった。」(名詞節)のような場合「～を好き」と動詞性を帯びるが、これは「好き」の表す観念がもともと「好く」という動詞型だったため、「を」も許容できるのだろう。